

【中学生の部】奨励賞

『友だちってなんだろう?』(齋藤 孝/著)

八戸市立第二中学校 3年 向井 真凜

「友だちってなんだろう?」表紙が私に問いかける。

私には「友だちが全て」という時期があった。何をしても「友だちと一緒に」がよくて、正直「ぼっち」でなければ誰でもよかった。広く浅く、うまくいかなければ距離を置く、それを繰り返せばいい。現実社会が難しければインターネットの中で繋がればいい。そんな私を、この本は名付けた「友だちがいないと不安だ症候群」と。一種の病気だ……。「一緒にいて楽しくて、笑顔になれる、元気になれる存在」それが友だち。明日の学校で、相手の目を見て、思ったことを言葉にして、正面から関わってみよう、本当の「友だち」を作ってみよう。菓のように効く一冊だ。

『大奥の御幽筆～あなたの思い届けます～』(菊川 あすか/著)

黒石市立黒石中学校 2年 平野 五葉

私はみんなと同じでなくてはいけないと思っていた。普通でないことが怖かった。そんな時、「その特別は、きっと誰かを救う」この言葉に胸を打たれた。

これは亡霊が見えるせいで呪われた子だと家族から罵られてきた里沙が、大奥に現れる亡霊たちの心残りを解き明かす物語だ。普通ではない自分が嫌いな里沙の力が、「自分にしかできない特別な力」へと変わっていく過程に、心温まり目頭が熱くなった。この本にはみんな同じである必要はないことと、欠点だと思っていたことが個性になることを教わった。もちろん、江戸文化が好きな人にも薦めたいが、欠点について悩み抱えている人に読んでほしい。きっと勇気をくれるはずだ。

『希望のひとしづく』(キース・カラブレーゼ/著 代田 亜香子/訳)

青森市立新城中学校 2年 八木橋 梨桜

皆さんは奇跡を信じるだろうか。この本は、アメリカの小さな町に住む、ライアン、リジー、アーネストの3人が町の人達の願いを知り、叶えていくという話だ。3人は性格も家庭環境もバラバラだが、人を思いやり、行動に移すことができる。そしてその行動が奇跡に繋がっていく。私は行動に移すことが苦手だ。お節介や勘違いなんじゃないかと思って見て見ぬふりをしてしまう。でもこの本は、勇気を出して優しさを行動に移したら、奇跡みたいなことが起こるのではないかと思わせてくれた。もし私と同じように優しさの行き場を見失っている人がいたら、ぜひ勧めたい。きっとこの3人は、あなたに勇気と奇跡を与えてくれるだろう。

『給食アンサンブル』(如月 かずさ/著)

南部町立福地中学校 3年 久保 惺奈

皆さんは”給食”とはどんなものだと考えていますか。1日の学校生活で一番楽しみなもの、それともただの昼食。他にもさまざまあると思います。この本には給食のメニューを通して、性格や考え方、行動などが変わっていく6人の中学生の物語が書かれています。私は1、2年生のときには思っていませんでしたが、3年生になり、月日がたつにつれて「この給食はあと何回食べられるのだろうか。」と考えることが増えました。卒業まであと8か月。まだまだ先のことですが、今日食べる給食が誰かにとって特別な給食だったとしたら・・・と考え、おいしくいただきたいと思います。

この本を読めば、毎日の給食に対する考え方や自分を変えるチャンスが訪れるでしょう。

『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』(汐見 夏衛/著)

弘前市立東中学校 2年 千葉 明歌里

この本は戦時中の日本にタイムスリップした主人公百合と特攻隊員彰の切ない恋の前途を描いた、涙なしには読めないラブストーリーです。私は百合と同じく何事にも苛立ってしまい、親にも当たってしまうという重なっている所がありました。ですが、愛する人・愛してくれる人の存在があったおかげで今、自分はここにいると百合を通して改めて感じさせてくれました。そして、彰の言葉にも百合を愛する気持ちが鮮明に伝わり、その優しい眼差しにも心がギュとなりました。この作品は、愛する人・愛してくれる人のいる温かさや生きることへの意味、希望、価値、そして、ありがたみを教えてくれるのでぜひ手に取って読んでみてください。

『博士の愛した数式』(小川 洋子/著)

弘前市立東中学校 3年 遠藤 凜希

昨年の夏、僕はおじをなくした。失意のどん底に突き落とされたような気持ちで悲しみに明け暮れていた。そんなとき僕はこの本に出会った。この本には、記憶が80分しかもたないという病気を抱えた博士、博士のもとで働く家政婦の私、私の息子のルート、この三人が登場する。僕はこの本を読み博士がルートに無償の愛を注ぐ姿におじの面影を感じ、三人が織りなす愛に満ちた悲しい物語に涙を流さずにはいられなかった。また、読み終えた後は、おじも博士のように病を抱えながらも懸命に生きていたのだとこの本に改めて気付かされ、一日一日を大切に過ごそうと思えた。生きることの大切さをこの本を通して皆さんに感じてほしい。

『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』(汐見 夏衛/著)

県立三本木高校附属中学校 2年 坂田 芽依

大嫌いな人が自分の世界を変えることはあると思いますか。この疑問が本を手にとった理由だ。「優等生」という言葉の響きが私は好きではない。責任、期待、信頼が重すぎる。この本を読んで私の心の中にとどめておいた気持ちが誰かに共感されているかもしれないと思った。中学生になってから家族、友人関係で悩むことが多くなった。登場人物の青磁の言葉は中学生・高校生だからこそ心にささる。そして始めにかいた疑問から「君と見る世界はこんなにも美しい」という表現に読み進めていくうちに納得する。この本は恋愛小説だが甘すぎない。誰でもこの本の世界に入りこんでしまう。自分の考え、世界の見えかたが変わる。ぜひ手に取って見てほしい。

『麦本三步の好きなもの』(住野 よる/著)

八戸市立下長中学校 2年 佐々木 偲葡

物事を決めつける。これが私の悪い癖。「こんなときはこう答える」、「あんなことが起こったらこうしよう」。そんなことばかり考えていた。私は決まりきったことしかやらないつまらない人間で自由には生きていない。そう感じていた。

麦本三步、少し変わった名前のちょっと変わった性格の登場人物。彼女は、私とは正反対の性格。こんな考え方は理解できない、最初はそう感じていた。しかし、読み進むごとに彼女の日常を自分のことのように感じ始めた。そんな不思議な感覚で彼女の自由さや柔軟な考え方に惹かれていた。開放感、爽快感が私の中に満ちてきた。なぜだろう。私のなりたい私を示してくれた大切な一冊だ。

『養生おむすび「&」』(高森 美由紀/著)

八戸市立下長中学校 2年 山本 紫葉

友達1人1人を大切に生活しているだろうか。また、誰かをはげまして、背中をおしてあげられるような行動をとれるだろうか。

私の特技はピアノをひくこと。ピアノの音で人を勇気づけられることなんてない、そう思っていた。しかし、そうではなかった。それをこの本が教えてくれた。

この本には料理が大好きな店主が登場する。そして客1人1人にあったおにぎりを作っていく。そのおにぎりは、背中をおしてくれるような温かさがある。

自分の大好きな事、得意な事を生かして誰かを勇気づけられる。自分に自信がなくなった人は必ず誰かの支えになっているから自分をみつめてほしい。勇気をもらえる一冊だ。